

JSOG Newsletter

Reason for your choice

No.2
JULY
2008

わたしたちの医療は“新しい生命”を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY



日米若手医師交換プログラム 参加体験記

ACOG (米国産科婦人科学会)

THE AMERICAN COLLEGE OF OBSTETRICIANS AND GYNECOLOGISTS

51,000人の会員を擁する米国産科婦人科学会 (The American College of Obstetricians and Gynecologists : ACOG)は、全米の産婦人科医に最新の知識と技術を提供する最も大きな集会として、年次臨床学術集会 (Annual Clinical Meeting)を毎年5月の中旬に開催します。今年は5月3日から5日間にわたり開催されました。日本産科婦人科学会から10名の若手医師が選抜され、参加しました。彼らは何を感じ、何を得てきたのでしょうか。

若手医師による 若手医師のための...

ACOG内には9000人の若手医師が登録されており、彼らを中心に活動を行う委員会 (JFCAG) が学会内に設置され、それぞれの地域において若手医師による若手医師のための学術や臨床の学会活動を行い、年次臨床学術集会では、自らプログラムを企画・実行しています。

わたしたちは、JFCAGが企画したプログラムを中心に、この集会に参加することになりました。初日のウエルカムパーティーでは、アメリカ全土から集まった研修医や若手医師が円卓テーブルに散らばり、夕食をとりながら自己紹介や、ディスカッション。お互い気軽に、挨拶や討論が出来るようになりました。

クイズ形式で 教授を質問攻め

期間中、毎朝6時半から約1時間、若手医師限定で、朝食付きモーニングレクチャーが用意されていました。米国の若手医師が、自分たちの経験した難しい症例を提示、クイズ形式で高名

3年前のハリケーン、カトリナによる大災害から復興した、ルイジアナ州ニューオーリンズにて開催されたこの集会に、カウントーパートナーである日本産科婦人科学会から、日米若手医師交換プログラムの一環として選ばれた、専門医取得前後の若手医師10名とコンダクター2名が派遣されました。

次期会長就任式と正式会員授与式では、壇上の役員と新たに正式会員と認定された医師全員が、グリーンのマントに身を包んでいました。

映画などでよく観る米国の大学の学位授与式にも似て、その厳粛なセレモニーは、わたしたちにとっても

■5月5日■

6時30分からBreakfast seminar。テーマはPatient Safety、つまりは医療ミス。日本もアメリカも変わらないのだと感じました。

企業展示では、日本にはないさまざまな形をしたベッサリーリングや、月経がほとんどこないOC錠など、日本では

みないものがあり面白かったです。夜は久しぶりの日本食を楽しみました。

■5月6日■

今日のBreakfast seminarは、アメリカにおける産婦人科医減少の問題、レジデント終了後の就職情報などいろいろなテーマについてでした。

Stump the professorsでは教授3人相手に症例提示をし、最終診断を当ててもらおうというものでしたが、症例提示の最後に使った医療費も書いていたのがアメリカならではだと思いました。→続きはWEBで

【浦田陽子 (岡山大学)】



■5月4日■

6時30分よりBreakfast seminarがあり、早朝にも関わらず日本人、アメリカ人、アルゼンチン人、チリ人の全員が出席していました。

アメリカにおける産婦人科医減少の問題

さすがニューオーリンズで、街は日曜日の早朝ということもあって、昨夜の雰囲気を残していました。

セミナーでは日本とは違い参加者からの質問が飛び交い、活発なものでした。やはり有料のセミナーであること、専門医更新のテストがあることが関係しているのでしょうか。

配布された資料の巻末にアンケート (声の大きさ、解りやすさなど)があり、演者にフィードバックできるようになっていました。

夜はACOG Welcome Reception。バンドの生演奏、ニューオーリンズ警察の白バイまででてるプラスバンド、装飾のテーマはカーニバルといったもので、日本との規模の違いを感じました。また、家族での参加が多く、プレイルームが完備されており小さい子供が楽しめるような工夫も目につきました。

感動的なものでした。

夜はバンケットやレセプションにも招待され、米国の若手医師や研修医、診療部長クラスの先生方、大会

長や次期会長にも気軽に声をかけることが出来ました。最終日の夜、長年JSOGとACOGの交流に尽力された慈恵医科

日本でも期待される 若手医師のパワー

このニュースレターを読まれた医学生や初期研修医の方々が若手医師として、ある程度ひとり立ち出来る頃には、若手医師が日本産科婦人科学会内で大きなパワーになるのではないかと。現在、外国の学会に若手医師を交換派遣するプログラムが、米国以外にカナダ、韓国、台湾との間で毎年行われています。参加者は、日本産科婦人科学会のHPに募集が掲載され、書類選考をもとに選抜されます。専門医取得前後の産婦人科若手医師なら、誰でも応募可能であり、世界の若手医師と交流し、知識と経験を得られる絶好な機会です。

挨拶と共にすぐに打ち解けた。ACOGの若手の会と同様の組織がJSOGがあれば、学会の多様性が増すかもしれないと感じた。さらに若手医師との交流で、米国では、resident→fellowになると、生活が一変すること。また産婦人科専門医になることが非常に大変であるが、人生の大きな転機になるということも聞いた。チリでは、MD, PhDが存在するが、非常に困難で険しい道であることも理解できた。→続きはWEBへ



■5月3日■ 5:30pm

Resident Reporter Reception/Welcome/ Dinnerに出席。

我々ともにJSOGから慈恵医大; 落合先生ご夫妻、久留米大学; 嘉村先生ご夫妻が出席され、全員が自己紹介を交えた挨拶と、日本・米国・アルゼンチン・チリから集まった産婦人科医師と交流、楽しいひとときであった。

米国では、若手医師のグループがACOGの組織に正式に存在しており、その代表者達とは

■5月2日■ 10:00pm

New Orleans 空港到着。Dallasからの乗り継ぎ便で皆疲れているかと思いきや、全員すこぶる元気であった。

初日から徹夜コース!

ホテルにチェック・イン!と思いきや、そのまま午前4時までフレンチクォーターに繰り出す事となった。

ごちゃごちゃとした狭い路地に19世紀の町並みが残るフレンチクォーターは、南欧の香り漂うエキゾチックな旧市街だ。

第7代合衆国大統領ジャクソンの騎馬像が立つジャクソン広場近くのシーフードレストランで、最初のご当地料理を食べた。その後飲み屋→カラオケ→ピザとお決まりの徹夜コースで初日は終了!

大学の落合教授、日本産科婦人科学会次期会長久留米大学の嘉村教授と奥様方を囲み、フェアウェルパーティーが行われました。

今集会の感想や、日本産科婦人科学会が出来るのか、自分たちの考えを両先生に述べ、最終日を締めくくることになりました。一方、日本に目を向ける

「マラソンレースに参加、賞品は...?」 右の記事は小野先生の体験日記を一部抜粋したものです。体験記全文は、日産婦ホームページ内「Reason for your choice」にてご覧いただけます。

「えっ、スイーツが無い!」 左の記事は浦田先生の体験日記を一部抜粋したものです。体験記全文は、日産婦ホームページ内「Reason for your choice」にてご覧いただけます。

産科婦人科学会 最大のイベント

第60回 日本産科婦人科学会 学術講演会

毎年春先に開催される学術講演会は、例年、全国から多くの産婦人科医が集い、1000題を超える演題が発表される、産婦人科最大の学会です。

今年は、東北大学の岡村博教授を学術集会長として、4月12日(土)～15日(火)、パシフィコ横浜で開催されました。今回は第60回という節目であり、1191題の演題、4つのシンポジウム、国内外の有名教授らによる講演などが行われ、過去最高の5366名の参加者が集まりました。

発表者の内容や、プレゼンテーションを審査して優秀演題賞などを競い合う、一般口演。

周産期、婦人科腫瘍、生殖内分泌の各領域の最先端の研究を議論する場であるシンポジウム。

学会が作成したガイドラインの解説などを行う教育研修プログラム。

海外の著名人を招き、スタンダードとアップデートを学ぶ国際的なセッション。

最新の基礎学問ばかりでなく、臨床的な生涯教育にも重点が置かれています。



湾の産婦人科学会には、毎年、日本の若手医師が派遣されています。学生、初期研修医、若手

生方と連絡を取りながら進めていく作業は、想像以上に険しい道のりでした。しかし、当日先生方とお会いして、徐々に緊張は解け、ディスカッションも大変盛り上がり、最後にはこれからも連絡を取り合っていくことを約束し、別れることができました。

専門医資格を取る時期前後の若手医師自らが企画立案し、テーマを決め、グループディスカッションを行います。今年アメリカ、カナダ、韓国、台湾、中国やフィリピンなど、海外から26名、国内から69名が参加し、交流を深めました。ちなみに、本会と交流のあるアメリカやカナダ、台湾の産婦人科医は、毎年、日本の若手医師が派遣されています。学生、初期研修医、若手

「自己紹介から始まり、その後周産期の問題点と各自が印象に残った症例をクイズ形式で発表しました。言葉は違っても抱えている問題は、点はやはり同じで、親近感を覚えました。みんなが流暢に話せたわけではありませんでしたが、リーダーがまとめてくださったこともあり、有意義で楽しい会でした。」

International Seminar for Junior Fellows (ISJF)

International Seminar for Junior Fellows (ISJF) は、専門医試験受験前の若手医師が、海外の若手医師と英語にて交流するもので、今回で4回目の開催です。毎回、参加者自身が内容を定めるスタイルですが、今回はグループに分けてのディスカッションと、全体発表が行われました。顔も知らない同士がEメールで連絡を取りあい、企画を創り上げていくのは、非常に困難な作業です。



「事前準備が思うように進まず大変でしたが、当日は拙い英語ながらも話が弾み、各国、各施設の様々な事情を知ることができました。」

特に米国、韓国でも産科医師不足がおこっており、さまざまな意見・対応があることを知りました。このような話し合いの機会や、同じ意識を持った仲間を得ることは、とても貴重な経験でした。」

産科婦人科学会ではこの様な国内・国際間での交流を促進するためのプログラムを数多く企画しています。医学部学生や研修医の先生に興味を持って頂ければ、ISJF企画者の一人として大きな喜びです。

今回、発表を通じて、科学としての医学を垣間見たことが一番の収穫でした。臨床との両立はしんどいですが、科学者としての自分の成長のために、大学院の残り2年間は研究の世界で、悔いのないように過ごそうと思っています。



赤堀洋一郎(岡山大)

大学院入学後2年が経過、これまでの研究成果をまとめようと、演題を提出したところ、思いがけず優秀演題賞候補演題に選出され、発表の機会が与えられました。大学院入学までは、大病院や基幹病院で臨床研修に励んでいましたが、実践に関わることはなく、講演会などでも基礎の話になると居眠り、大学院入学も「なんとなく学位がほしい」といった理由。研究テーマは「妊娠とインスリン抵抗性」となり実験を始めました。実験は学生実習以来で、思ったように進まず、何度となく心が折れそうになりましたが、上司や先輩の助言や励ましにより、乗り切ることができました。何とか研究が形になり、光が差ししたような感覚は、今でも忘れられません。スライドの見やすさ、所定時間の遵守に重点を置き、準備を始めました。発表し、相手の理解を得る事が、いかに難しいか改めて勉強になりました。今まで臨床領域での発表の経験はありませんでしたが、研究領域での発表は今回が初めてで、院内での予行で理論武装してきたものの緊張しました。発表中スクリーンが大きすぎて、ポインターでどこを指しているのかわかりにくかったり、終了のブザーの音が大きすぎてあせつたりと、トラブルはありましたが、あつという間に終了しました。発表後、会場の外で上司や仲間の先生に、ねぎらいの言葉をもらった時の充実感は忘れられません。残念ながら優秀演題賞は逃しましたが、今後の実験への活力になりました。研究をすることで診察や手術から遠ざかり、臨床能力が低下するだけで、何の役にたつのか疑問でした。しかし、今まで雑誌で読み飛ばしていた研究分野の論文に興味があり、多少なりとも、理解できるようになったこと、疾患に対する見解が診断治療以外にも、病態に基礎的な背景が必ずあることなど、多くのことが学べています。学生時代は部活に明け暮れ、試験といえは丸暗記、医者になってからも日々の臨床の任務をこなすことで一杯で、自分が「学士」という学者であることを、意識しなくなっていました。